

# 「以上」と「からには」の相違に関する考察

馬 紹 華

## 1. はじめに

複文において因果関係を表す接続形式には様々あり、接続助詞によるもの以外に、「からには」「以上(は)」「うえは」「かぎりは」など、複合辞による接続形式も広く使用されている。本稿は、例文(1)、(2)のような接続助詞的な機能を持つ複合辞「以上」と「からには」を考察の対象とする〔注1〕。

- (1) 新聞記者である以上誰でも予定記事を書くことはあるが、予定記事の持っている荒さもちぐはぐさもなかった。(井上靖『あすなる物語』)
- (2) 「食糧はこれでおしまいだ。食糧がなくなったからには下山するより手はないだろう」(新田次郎『孤高の人』)

従来の研究では、「以上」と「からには」が共に因果関係を表す類似表現だと見なされているが、両者の相違については詳細に言及されていない。本稿は、「以上」と「からには」が現れる構文の意味特徴を中心に、両者が置き換えられる場合と置き換えられない場合を分析し、「以上」と「からには」の相違を明らかにする。

## 2. 先行研究及び問題点

「以上」と「からには」に関する従来の研究は、構文上での意味機能という観点から論じたものと、主節の共起制限という観点から論じたものの、主に二種類に分かれる。

### 2. 1 意味分析の観点から論じたもの

意味分析の観点から「以上」と「からには」の用法を詳しく論じた先行研究は、塩入(1992)(1995)、中里(1997)などが上げられる。塩入(1995)では、意味用法について詳細に分析されており、「からには」の意味特徴を次のように結論付けている。

からには：条件節は主節の判断を下すのに必然的な根拠であることを表し、主節は必然的な根拠によって下された判断を表す。(塩入1995)

一方、中里（1997）は、「からには」は構文の前件と後件の因果関係を表す接続表現だと主張している。表現は異なるものの、「からには」の意味用法を構文上において「前件が後件の判断を下すのに必然的な根拠を示す」と定義した点は塩入（1992）（1995）と共通する。さらに、「からには」と類似表現「以上」との重要な違いについては、以下のように記述している。

[AからにはB]：前件と後件を結び付けるのは話し手の主観。

[A以上B]：前件と後件を結び付けるのは話し手の主観を超えた必然性。（中里 1997）

しかし、多くの場合において「からには」と「以上」は置き換え可能であることから、両者の違いを「主観的」、「客観的」と規定することは全ての状況に適応するとは言い難い。例えば、

(3) 約束したからには／以上、必ず守らなければならない。『日本語教育事典』

用例（3）において、「からには」と「以上」は両方とも用いることができるが、「主観的」と「主観を超えた必然性」の差はそれほど感じられない。また、「からには」が表す因果関係の結び付きが「主観的」とする主張は、「必然的根拠を示す」という意味用法の定義と矛盾するように思われる。「必然的」でありながら「主観的」であることは、通常一致しない。

## 2. 2 共起制限の観点から論じたもの

「からには」、「以上」構文の主節に、多様なモダリティ形式が用いられるという特徴に注目して、文末との共起制限という観点から論じたものには森田・松木（1989）、遠藤（1994）、仁田（1995）、久保（1997）などが挙げられる。

森田・松木（1989）、遠藤（1994）はともに、「からには」構文の主節は「～なければならない」のように、「義務・意志・推量・禁止・断定」などの話し手の意志を強調する表現が現れると述べている。

仁田（1995）では、「からには」の主節表現である命令・意志・義務・当為的判断・希望を、同趣の性質を有する文として一括し、「未実現の事態の遂行に対する期待・待ち望みを表す文であると規定している。

久保（1997）は、仁田（1995）を踏まえて、主節の言表事態めあてのモダリティのタイプは認識系（義務・推量・断定）を表すものか、情意系（意志）を表すものかによって、「からには」の用法〈1〉「判断の根拠を表すもの」と〈2〉「待ち望みの根拠を表すもの」だと定義している。「以上」は「からには」と同様に二種類の根拠を表す用法があると述べたが、しかし、両者の違いは下記の記述からさほど感じ取れないのである。

からには：その用法は、大きく、〈1〉判断の根拠を表す用法と〈2〉待ち望みの根拠を表す用法とに分かれ、中心的用法は、〈1〉の用法であると考えられる。

以上：〈1〉判断の根拠を表す用法と〈2〉待ち望みの根拠を表す用法をもつが、「からには」と異なるのは、〈1〉の用法での使われ方が圧倒的に多いという特徴を持つ。(久保 1997)

むしろ、条件節の述語形式について、「ナイ形をとる「以上」の場合を、「からには」に置き換えてみると、容認しづらくなる」と指摘した点は従来の先行研究と異なるが、具体的な理由は示されていない。

確かに、条件節に否定形が取れるか否かによって、「以上」と「からには」の相違を考察するのは一つの手段になりそうである。本稿は「以上」構文を肯定形「～以上」と否定形「～ない以上」の二つに分け、「からには」との対応状況を調査することを通して、両者の相違を検討していくこととする。

### 3. 「以上」と「からには」の相違に関わる二つの概念

上述の先行研究から、類似表現とされる「以上」、「からには」の構文における意味特徴は、

① 条件節が主節の判断を下すのに必然的な根拠を示す。

② 主節に義務・意志・推量・断定などの多様なモダリティ形式が用いられる。

の二点にまとめられる。これらを踏まえ、本稿は二つの構文について以下に述べる新たな意味特徴を指摘しておきたい。

#### 3. 1 「からには」構文の“確定的事態”

まず、「からには」構文の条件節に着目すると、確定的事態の内容を述べるものが殆どである。この点は、先行研究久保(1997)、毛(2004)の条件節形式に関する統計的調査にも表われている。

久保(1997)、毛(2004)の調査によると、「からには」構文における条件節の時制は、凡そ次の三種類に分けられる。第一は述語形式が過去形タである場合、第二は述語形式が非過去形であるが事態が発生している場合、第三は述語形式が非過去形であるが事態が発生していない場合である。

第一の、条件節の述語形式が過去形タである場合は毛(2004)の調査では最も多く、その用例には次のようなものがある。

(4) あれだけのことがおきたからには、よほどのことがあったにちがいない……。しかし、具体的にどんなことがあったかは、理一にわかるはずがなかった。

(立原正秋『冬の旅』)

(5) それよりも、話がここまで来たからには、北川大学はまちがいなく落ちているのだ、という確信に似たものが再び太郎の心を重くとざした。

(曾野綾子『太郎物語』)

(4)、(5)の条件節の時制が過去形であり、条件節の内容が主節より以前にすでに発生した実現済みの事態であることが分かる。実現済みの事態は、事態の発生が確実であるため、確定的事態だと認定できる。

第二の、条件節の述語形式が非過去形になるのは、事態が主節の発話時点においてすでに発生している場合で、次のような用例である。

(6) もっとも、部落の連中だって、これだけ無理な冒険をあえてするからには、一応の予防策くらいは、当然立てているはずだ。(安部公房『砂の女』)

(7) 「愛川。それを言いなさい。あんなことをするからには、よくよくのことがあったのだろう。(山本有三『路傍の石』)

(6)、(7)の条件節の時制は非過去形になるが、「これだけ」、「あんな」といった状態の様子を示す表現と共起するところからみると、条件節の事態は主節の発話時にすでに発生していると言えるだろう。何故なら、まだ実現していない事態については、発生後の様子を把握できないため、様態を表す表現とは共起できないはずである。

第三は、条件節の述語形式は非過去形になるが、事態が主節の発話時点においてまだ発生していない用例には以下のようなものがある。

(8) 僕はカネの説明するままだにタカの素姓を手帳に書きとめた。外来者である死人の葬式を出すからには、その人の住所姓名、身分、遺族の名前を後日のため書きとめて置くべきだ。(井伏鱒二『黒い雨』)

(9) 「それほどまでにすすめるのなら、立候補してもいい。しかし、やるからには意義のある画期的なことをやりたいと思う。無所属で出て、勝敗は二の次として選挙運動をやってみたい。……」

(星新一『人民は弱し官吏は強し』)

(8)、(9)は条件節の事態は主節の発話時より後に発生するが、前後の文脈から見れば、事態の発生は確実であるため、実現予定の事態と言えよう。つまり、(8)は空襲により被爆した外来者であるタカは、物語の発話時においてはまだ生存しているが、後日に葬式を出している。(9)は発話時点では話し手はまだ立候補していないが、上接する文脈から立候補する願望があることが伺える。

このように、「からには」構文における条件節で述べられていることはたいてい実現済みの事態か、実現予定の事態であることが分かる。実現済みの場合は確定的事態と認識されるのは当然であるが、実現予定の場合も事態は実現していないものの、実現することが確実に予測できるので、同様に確定的事態だと考えることができる。

さらに、確定的事態は実現済みであろうが、実現予定であろうが、事態の発生が確定である点において仮に実現する仮定的事態とは対立する概念と考えられる。

### 3. 2 「以上」構文の“対照的含意”

一般的に含意とは、表面に現れない意味を含み持つことである。「からには」構文は事態が既に生じていることを明白に表しているのに対し、「以上」構文は表面に現れない事態発生の意味を含意する構文である。以下は用例を挙げて、分析してみる。

- (10) 私もあなたに逢い、あなたとお話し、あなたと一緒に遊んだり笑ったりするまではこの世にこんなよろこびがあり、人間がこんなにまでよろこべるものかと言うことを知りませんでした。知らない内はよろしい。しかし一度知った以上は、それを失っては生きてはゆけないような気がします。

(武者小路 実篤『友情』)

- (11) 「わしはもともと、国を奪うためにこの美濃にきた。人に仕えて忠義をつくすために来たのではない。ただの人間とは、人生の目的がちがっている。目的がちがっている以上、尋常の人間の感傷などは、お屋形さまに対しては無い」

(司馬遼太郎『国盗り物語』)

- (12) 六人組は弘法小屋を出ていった。あとをたのむといわれて、うなずいた以上、加藤はあとしまつをしなければならなかった。寝具を片づけ、囲炉裏の火を始末して、彼は、彼の荷物をまとめて小屋の外へ出ると、六人組のあとを追った。

(新田次郎『孤高の人』)

- (13) しかし、変にこんどのことは気になって仕方がなかった。これは犯罪ではない。ほうっておけばよいことである。それよりも新しい事件はつぎつぎに起って、やらねばならない仕事は彼を待つであろう。しかし——彼は、この引っかけが解けない以上、いつまでも気分がはれないように思えた。

(松本清張『点と線』)

- (14) いや誤解してはいけない……おれと、おまえとの間には、契約めいたものなど、最初から何もなかった。契約がない以上、契約破棄ということもありえない。それに、おれの方にとって、ぜんぜん損失がなかったわけじゃないのだ。

(安部公房『砂の女』)

- (15) 学生として私は何をやるべきなのか。学校側が四十四年度のプログラムを何にも示していない以上、今授業料を払いこむことはない。中核なり、社会学同のデモの隊列に加わった以上、それはその組織とのかかわりを意味する。留置場に入るには独りでもできる。

(高野悦子『二十歳の原点』)

(10) ~ (12) は肯定形「～以上」であり、(13) ~ (15) は否定形「～ない以上」の構文である。肯定形でも否定形でも、これらの「以上」構文は文脈から表面に現れなかった反対の意味を読み取ることができる。具体的には、(10) は世にこんなよろこびがあることを知らなかったら、知らないままで生きていく可能性が高い。(11) は目的が同じであれば人に仕えて忠義をつくすこと、お屋形さまに対して尋常の人間の感傷を持つはずである。(12) はうなずかなかつたら、加藤はあとしまつをしなければならぬ義務はなくなる。(13) はこの引っかけが解けたら、気分がはれる。(14) は契約があるなら、契約破棄ということもあり得る。(15) は四十四年度のプログラムが示されたら、当然受講計画をたてることになり、授業料を払わなければならない。

このように、上記の「以上」構文は概ね原文と反対の状況においても、論理上前件、後件の順接関係が成立することが分かる。便宜上、本稿は文脈で提示されなかった反対の状況において、前件、後件の順接関係の成立を含蓄する意味機能を、“対照的含蓄”だと定義する。

以上、「からには」構文と「以上」構文における二つの重要な意味特徴を確認してきた。本稿では“確定的事態”と“対照的含蓄”という二つの概念を立て、「からには」構文と「以上」構文とが如何に関わるかを念頭に置きながら、両者の相違を考察していく。

#### 4. 「～以上」構文と「～からには」構文との対応

##### 4. 1 「～以上」が「～からには」に置き換えられる場合

先行研究はナイ形を取れるか否かを、「以上」構文と「からには」構文の違いだと指摘したが、果たしてそれが適切であるかどうかを検証するために、本稿は「以上」構文を肯定形「～以上」と否定形「～ない以上」に分け、「からには」構文との対応状況を考察していく。肯定形「～以上」が「～からには」と対応する以下のような用例があった。(16) ~ (20)

(16) ふじ子は、信夫の死を信ずることができなかった。約束どおりこの汽車で、信夫が来るにきまっている。えんじの角巻を着て、迎えに出ると約束した以上 (／からには)、自分は改札口で信夫を待っていなければならないと、ふじ子は思った。

(三浦綾子『塩狩峠』)

(17) 結婚を承諾した以上 (／からには) その良人に行きづまるのが女の人の当然な道ではないのでしょうか。木村君で行きづまって下さい。木村君にあなたを全部与えて下さい。木村君の親友としてこれが僕の願いです。

(有島武郎『或る女』)

(18) お寺の方へはいかないときめた以上（／からには）、お寺へは行きたくなかった。  
あのお寺がなんという名前なのか、由緒があるのかないのか、そんなことはもう  
どうでもよかった。彼はなるべく早く、お寺との距離をつけたかった。

（新田次郎『孤高の人』）

(19) この船に乗っていることが証明されている以上（／からには）、接続の《まりも》  
に乗車したことも当然に証明されたのだ。安田辰郎の供述には、一分の嘘もなか  
った。

（松本清張『点と線』）

(20) 意外なのは、ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。  
これはまったく予期に反したことだった。海にむかっている以上は（／からには）、  
当然下り坂でしかるべきではあるまいか。

（安部公房『砂の女』）

まず、確定的事態の観点からみると、これらの文において、条件節がすべて「約束し  
た」、「承諾した」、「決めた」、「証明されている」などのように実現済みの事態である  
ことが分かる。従って、“確定的事態”が「～以上」構文と「～からには」構文の共通  
点となり、上記の構文において両者が置き換えられる前提となっていると言えるだろう。

次に、対照的含意の観点から考察すると、(16) は迎えに出ると約束しなかったら、  
ふじ子は改札口で信夫を待つ義務はなくなる。(17) は結婚を承諾しなければ、当然木  
村君で行きづまらなくてもよい。(19) はこの船に乗っていることが証明されなければ、  
接続の《まりも》に乗車した事は証明されないことになる。(20) は常識として海があ  
るところは盆地だと考えられ、海に向かっていることは当然下り坂になっていると思わ  
れる。逆に言えば、海と反対の方向に向かったら、必ず上り坂となる。このように、上  
記の構文はいずれも対照的含意が含まれている。

このように、「～以上」と「～からには」が置き換えられる場合、“確定的事態”と  
“対照的含意”二つの概念が成立することが明らかになった。

#### 4. 2 「～以上」が「～からには」に置き換えられない場合

前節で「～以上」と「～からには」が置き換えられる場合において、“確定的事態”  
と“対照的含意”二つの概念が成立することを確認した。これに対して、両者が置き換  
えられない場合の用例には次のようなものがある（(21) ～ (25)）。

(21) 私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、  
なるべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なので、私が  
死んだ後でも、妻が生きている以上は（／\*からには）、あなた限りに打ち明け  
られた私の秘密として、凡てを腹の中にしまっておいて下さい。

（夏目漱石『こころ』）

(22) 「おまえは嘘を言っている！おまえがいつまでも嘘を言う以上（／\*からには）、

私はおまえに会いたくないね (立原正秋『冬の旅』)

- (23) このノートも終りである。いつまで続くか私はまだまだ果てしなく続いていく。私の生活が混沌としたものである以上 (/\*からには)、整理する必要はない。それどころか、私には混沌さが、まだ足りないのではない。

(高野悦子『二十歳の原点』)

- (24) 今は辛くても、きっとこのことも、結果としてはよいことであったという日が来る。神が生きておられる以上 (/\*からには)、信夫のことも、神が守って下さるにちがいない。

(三浦綾子『塩狩峠』)

- (25) 東大闘争では常に自己の主体性が問われた。立命にその危機が内在する以上 (/\*からには) (おそらく現在どこの大学にもそれは内在するにちがいない)、己れのものとして考えざるを得なかった。しかし、それも疲れてしまった。弱すぎる。

(高野悦子『二十歳の原点』)

まず、確定的事態の観点からみると、上記の構文における条件節が必ず確定的事態とは言い切れない。たとえば、(21) は私が死んだ後、妻は生きていることは話の論点ではなく、期間を話の焦点として「妻が生きていたら」という条件文を構成する働きをしている。(22) は発話時点で相手が嘘を言っていることが指摘されているが、今後も嘘を言うかどうかは分からない。発話者が仮にそうなる場合を想定したのである。(23) も現在の生活が混沌であるか否かは重要ではなく、「この混沌とした生活が続いていたら」という仮定的な条件が発話の焦点となっている。(24) の条件節は仮説的事態と言える一方で、反事実的事態とも言える。いずれも確定的事態ではないことが明らかである。本稿は上記の構文における条件節の事態をまとめて仮定的事態と考えたい。

次に、対照的含意が含まれるか否かを考察すると、これらの「以上」構文はすべて反対の状況に対応する前件と後件の間に順接関係が成立することが読取れる。その理由は、上記の構文が以下のように変換できるからである。

(21) ‘妻がなくなったら、あなた限りに打ち明けられた私の秘密を話してもいい。

(22) ‘おまえが嘘を言わなかったら、私はおまえに会う。

(23) ‘私の生活が混沌としたものでなくなったら、整理する。

(24) ‘神が生きておられなければ、信夫のことを守って下さるとは言えない。

(25) ‘立命に自己の主体性という危機が内在しなかったら、己れのものとして考えないだろう。

以上、「からには」構文の条件節が確定的事態であるのに対して、「以上」構文の条件節は確定的事態でも仮定的事態でも可能である。さらに、「以上」構文は肯定形式においては、それが「からには」構文に対応する場合でも対応しない場合でも、“対照的含意”という意味機能が持つことが明らかになった。

#### 4. 3 「～からには」が「～以上」に置き換えられない場合

4. 1節、4. 2節で、「～以上」が「～からには」に対応する場合と対応しない場合を考察してきた。反対に、「～からには」が使えて「～以上」が使えない文脈も当然存在するはずである。それについて以下に少し検討していきたい、用例は以下のようなものである。(26)～(29))

- (26) 「刺すからには( / ? 以上) 庖丁を持たなければならない。その庖丁を台所から持ちだしたのもきみだというのか？」 (立原正秋『冬の旅』)
- (27) タレントや流行歌手になれた以上、人並以上の才能を持っていたし、映画俳優の卵であるからには( / ? 以上)、これまた人並以上の美貌をそなえていた。 (立原正秋『冬の旅』)
- (28) 椎葉村を訪れた去年の十一月、氏は佐々木喜善に会い、東北の遠野郷の話を聞いた。『後狩詞記』に次いで、『遠野物語』が、氏の自費による第二の出版となる。「西南の生活を写した後狩詞記が出たからには( / ? 以上)、東北でも亦一つは出してよい。 (柳田国男『遠野物語』)
- (29) 榆病院の正面の門柱は、いかめしい見あげるような石柱であった。芯の芯まで堅く、緻密で、頑丈な御影石であった。石というからには( / \* 以上) 芯まで堅いのは当然といえようが、わざわざこう断らねばならない理由はあとでわかる。 (北杜夫作『榆家の人びと』)

上記の構文において、(29)「～というからには」は慣用句として「以上」と置き換えられないが、(26)～(28)は全く「以上」が用いられないわけではないが、不自然になる。つまり、「以上」の容認度には幅があるかもしれないが、「からには」とは容認度にかなり差があると思われる。また、確定的事態という観点から見ると、(29)の「～というからには」という慣用表現を除き、他は一回性の事態としておおむね実現済みの確定的事態を表すと思われる。

次に対照的含意が含まれるか否かを検討すると、上記の構文は必ず反対の状況を含意するとは考え難い。何故なら、反対の状況を反映する文章は成り立ち難いからである。

- (26) # 刺さなければ庖丁を持つわけがない。  
(27) # 映画俳優の卵でないと、人並以上の美貌をそなえない。  
(28) # 西南の生活を写した後狩詞記が出なかつたら、東北は出す必要がない。  
(29) # 石でなければ、芯まで堅いのは当然ではない。

上記の例文から反対の状況を表す文章に変更してみると、社会的一般常識にそぐわない文になってしまう。たとえば、(26) #は「刺さなくても、庖丁を持つ可能性はある」、(27) #は「映画俳優でなくても、美しい人は世の中にはいる」、(28) #は「西南の生活を写した後狩記が出なかつたら、東北は出す必要がないとは言えない」、(29) #は

「石でなくても堅い物質として金属などが挙げられる」のように、反対の状況において、条件節と主節の順接関係が成立するとは限らないため、(26)～(29)の構文は対照的含意を持たないことになる。

## 5. 「～ない以上」構文と「～ないからには」構文との対応

これまで、肯定形「～以上」と「～からには」の対応状況を見てきたが、これからは否定形「～ない以上」と「～ないからには」の対応状況を考察していく。久保(1997)も指摘したように、「～ないからには」という形式はあまり見かけないが、全くないというわけでもない。久保(1997)が取り上げた用例は以下の通りである。

(30) もしその前後に小便をしていたとしたら、私は小便をするときの傷の痛み具合をはっきりと覚えているはずだ。それを覚えていないからには、私はきつと小便をしていなのだ。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

(31) 集団からの要請が絶対のものでないからには、演技者は自らの役割をしかも独りで決定しなければならないのだから。

(立原正秋『冬の旅』)

久保(1997)は、上記の二例について、「人によって、容認できるかできないか、微妙である」と指摘しているが、筆者には殆ど違和感のない自然な文のように思われる。

そもそも、「からには」構文の前件が肯定形である場合は、事態の実現が確実であるため、肯定の確定的事態だと考えられる。一方で、前件が否定形の場合は、事態が実現しなかったこと、もしくは実現しないことを意味するため、事態の不成立が確実であることから、否定の確定的事態だと考えるのが妥当であろう。

ここで、(30)「それを覚えていない」こと、(31)「要請が絶対のものでない」ことはまさに否定の確定的事態である。否定形「～ないからには」の用例は先行研究にも指摘されたように多くない。その理由は肯定の事態が確定的事態と認識されやすいのに対し、否定の事態は確定的事態と認識されにくいという一般的な見方によるのであろう。従って、久保(1997)が指摘した上記の二例において、容認できないのはナイ形を取るためではなく、否定の事態が確定的事態として容認し難いためだろうと思われる。

しかし、本稿は否定の事態でも確定的事態と見なすべきと考えるため、以下に「～ない以上」と「～ないからには」の対応状況を検討していく。

### 5. 1 「～ない以上」が「～ないからには」に置き換えられる場合

否定形「～ない以上」は肯定形と同様に、「～ないからには」と置き換え可能と置き

換え不可能の二つの場合に分けられる。置き換え可能の用例には次のようなものがある  
(32)～(37)。

(32) これまでのしらべではほかに余罪はないようだから、本来ならそのまま召放しに  
するところだが、住居も請人も申立てず、また職の有無も云わぬ以上（／からには）、  
無宿人の処分はまぬかれぬ、よって石川島の人足寄場へ送ることにした  
から、そのように心得るがよい。  
（山本周五郎『さぶ』）

(33) だから重太郎も、納得のゆかない気持ながらも、口をつぐんでいっさいの進行を  
見送ったのであったが、口を出し得ないことと、心の落ちつきとは別のことであ  
る。いや、口が出せないだけに、気分のもやもやとしたものは、いっそうこうじ  
たのであった。この二つのはっきりした答えが出ぬ以上（／からには）、彼の  
心は何としても落ちつけそうになかった。  
（松本清張『点と線』）

(34) 「法治国である以上法に従うのは致し方ない。だが女医者の場合は女の医者は困  
るというだけで、“女が医者になってはいけない”という条文はない。ない以上  
は（／からには）受けさせて及第すれば開業させてやるのが筋だ。もし女がいけ  
ないのであるならば“女は医者になるべからず”という一項を書き入れておくべ  
きだという理屈になろう」  
（渡辺淳一『花埋め』）

(35) ニューヨークでは主要新聞が軒並み休刊中で、僅かにゲリラ的に発行している小  
新聞がスタンドの店先に並べられているくらいだった。ニュー YORK に着いて、  
まず私はアリとスピックスの一戦を、ニュー YORK のスポーツ記者がどのように  
報じているかを知りたいと思っていたが、新聞が出ない以上（／からには）それ  
は不可能なことだった。  
（沢木耕太郎『一瞬の夏』）

(36) いろいろな神父たちにその点を訊ねました。フェレイラ師にもたしか同じ質問を  
した筈です。その時、フェレイラ師が何と答えられたか憶（おぼ）えていませぬ。  
憶えていない以上（／からには）、私の疑問を一挙に氷解してくれるほどのもの  
ではなかったのでしょうか。  
（遠藤周作『沈黙』）

(37) もしもあなたを愛していたら、あたしはあなたに魔法をかけて仔鱈（こわに）に変  
えてでも、それともいっそあなたを殺してでも、あたしの蜜（みつ）のなかにとじ  
こめてしまったことでしょう。自分が愛していない以上（／からには）、あなた  
に愛されることは考えてもみませんでした。  
（倉橋由美子『聖少女』）

これらの構文の条件節に注目すると、(32)「職の有無を云わぬ」、(33)「二つのはっ  
っきりした答えが出ぬ」、(34)「“女が医者になってはいけない”という条文はない」、(35)  
「新聞が出ない」、(36)「憶えていない」、(37)「自分が愛していない」、はすべて否定  
の確定的事態である。

また、対照的含意を含むか否かを見ると、上記の否定形構文は以下のように反対の肯  
定形構文に変換できる。

- (32) ‘住居と請人を申立て、また職があると云ったら、無宿人の処分かは免れる。
- (33) ‘はっきりした答えが出たら、彼の心は落ちつけそうになるかもしれない。
- (34) ‘“女が医者になってはいけない”という条文があるなら、その条文に従うが、
- (35) ‘新聞が出たら、アリとスピックスの一戦を、ニューヨークのスポーツ記者がどのように報じているかを知ることができる。
- (36) ‘フェレイラ師が何と答えられたか憶えていれば、私の疑問を一挙に氷解してくれるほどのものだと言えるでしょう。
- (37) ‘自分が愛しているなら、あなたに愛されることを当然考える。

以上の通り、(32)～(37)の「～ない以上」構文の主節が、条件節が反対の肯定状況に変わるとともに、それに対応する主節に変化していく。つまり、反対の状況においても、条件節と主節が順接関係であることは変わらない。故に、否定形「～ない以上」の構文でも“対照的含意”を持つと思われる。

## 5. 2 「～ない以上」が「～ないからには」に置き換えられない場合

否定形「～ない以上」の構文でも、条件節が確定的事態である場合は「～ないからには」と置き換えられると述べた。一方、否定形「～ない以上」は「～ないからには」と置き換えられない場合があり、その用例は次のようなものである((38)～(42))。

- (38) 三四郎には三つの世界が出来た。一つは遠くにある。与次郎の所謂明治十五年以前の香がする。凡てが平穩である代りに凡てが寐坊気ている。尤も帰るに世話はいらぬ。戻ろうとすれば、すぐに戻れる。ただいざとならない以上は（／＊からには）戻る気がしない。  
(夏目漱石『三四郎』)
- (39) しかし私は、この点になるとナオミの方にも同じ弱点があることを知っていました。なぜなら彼女は、私と一緒に暮らしてこそ思う存分の贅沢が出来ますけれど、一度と度此処を追い出されたら、あのむさくろしい千束町の家より外、何処に身を置く場所があるでしょう。もうそうなれば、それこそほんとに売笑婦にでもならない以上（／＊からには）、誰も彼女にチャホヤ云う者はなくなるでしょう。  
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
- (40) 「あなたの訖諾を得ない以上は（／＊からには）、たといどんなに書きたい事柄が出て来ても決して書く気遣はありませんから御安心なさい」  
(夏目漱石『硝子戸の中』)
- (41) この一点が合理的に説明されない以上（／＊からには）、『点と線』全編のプロットは、その針の穴ほどのキズから土崩瓦解する危険もなきにしもあらずである。  
(松本清張『点と線』)
- (42) 改変したばかりの無限乱数が、十日や二週間ですぐ解けてしまうというのは、前

述の通り、現物を盗まない以上（／＊からには）暗号の常識として不可能で、軍令部四部が、「絶対にそんなはずはない」と言い張るのは、必ずしも理が無いわけではないのであった。（阿川 弘之『山本五十六』）

まず、条件節の事態を分析すると、上記の構文はいずれも確定的事態ではなく、仮定的事態であることが確認できる。たとえば、(38)「ただいざとならない」事態はまだ発生しておらず、発生する予定もなく、確定的事態とは言えない。むしろそれを仮定的な事態として、後件事態が成立する条件を提示する意味と理解される。さらに、もう一例をみると、(42)「現物（乱数表）を盗む」事態が果してあったかどうか誰も分からない、ここはただ改変したばかりの無限乱数が十日や二週間で解けることは常識として不可能だが、可能な場合もありうるとして一種の推測をしているにすぎない。他も同様で、これらの条件節が確定的事態ではなく、仮定的事態であることを表している。

次に、これらの構文が対照的含意を持つか否かを見るため、構文を反対の状況に変換してみる。

(38) ' いざとなったら、戻ります。

(39) ' 売笑婦にでもなったら、彼女にチャホヤ云う者がいるかもしれない。

(40) ' あなたの許諾が得たら、書きますが。

(41) ' この一点が合理的に説明されたら、『点と線』全編のプロットは、その針の穴ほどのキズから土崩瓦解する危険がなくなる。

(42) ' 現物（乱数表）が盗まれたら、改変したばかりの無限乱数が、十日や二週間ですぐ解けてしまうことが可能である。

以上のように、条件節の内容を反対の状況に変更しても、主節との間の順接関係が成立する。故に、今まで見てきた「以上」構文は肯定形でも、否定形でも、対照的含意が常に含まれていると言える。

本来は、否定形「～ないからには」が使える文脈で「～ない以上」が使えない場合を考察しなければならないが、否定の事態が確定的事態として容認されにくいと、否定形「～ないからには」の用例が少ないため、この部分の考察は断念せざるを得ない。しかし、否定形でも確定的事態と考えられるため、この場合はおおむね肯定形「～からには」の文脈に「～以上」が対応しないケースと同様に考えてもよいと思われる。

## 6. 「以上」と「からには」の対応関係

以上、本稿は「以上」構文と「からには」構文にとって重要な意味特徴を“対照的含意”と“確定的事態”という二つの概念を用いて、肯定形と否定形における両者の対応状況について考察してきた。その結果、「からには」構文の条件節が常に確定的事態であるのに対し、「以上」構文の条件節は確定的事態でも仮定的事態でも可能なことが分

かった。さらに、「以上」構文は常に対照的含意を含むのに対し、「からには」構文は「以上」構文と置き換えられる場合にのみ対応することが明らかになった。これを図表で示すと、次の通りになる。

図1 「以上」構文と「からには」構文の意味特徴

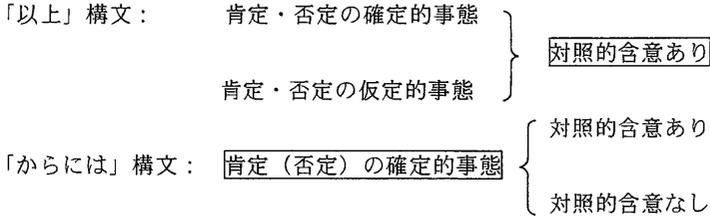
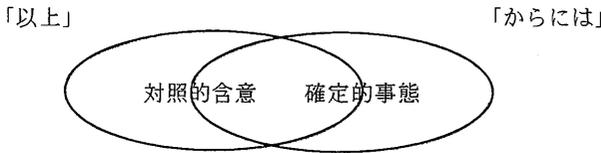


図1から分かるように、類似表現と言われる「以上」と「からには」は構文の意味特徴がずいぶん異なる。さらに、両者が言い換えられる文脈は、条件節が確定的事態で、かつ対照的含意が含まれる場合に限られることが明らかになった。つまり、下記の図2に示した通りになる。

図2 「以上」と「からには」の対応状況



さらに、「以上」構文と「からには」構文が何故に対照的含意を持つようになったかについて、少し検討を加えたい。恐らく、「以上」構文における含意の機能は、本来基準を超えるという漢語「以上」の原義と関連があると推測できる。漢語「以上」はある基準を境に、物事が成立する領域と成立しない領域の二つに分かれ、二つの領域が接続助詞化した「以上」の用法にもこのことが反映され、字面通りの“表”の意味の背後に含意された“裏”の意味を持つことになったのではなからうか。一方、「以上」構文と置き換えられる「からには」構文には対照的含意を読み取れるが、置き換えられない「からには」構文にはこのような含意は読み取れない。つまり、「からには」構文にとって、対照的含意は本来の性質ではないと考えるのが妥当であろう。

## 7. おわりに

本稿は“確定的事態”と“対照的含意”という二つ構文の意味特徴に注目して、肯定形と否定形に分けることを通して、「以上」構文と「からには」構文との対応状況を考

察してきた。その結果、以下のことが明らかになった。

- I 「からには」構文の条件節は確定的事態（肯、否）を要求するのに対して、「以上」構文の条件節は確定的事態（肯、否）でも仮定的事態でも（肯、否）可能である。さらに、両者の本質的な違いは前件にナイ形が用いられるか否かではなく、確定的事態であるか否かにある。
- II 「以上」構文は常に対照的含意を含むのに対し、「からには」構文は「以上」構文と置き換えられる場合のみ、対照的含意を含む。

[注]

1 遠藤（1984）、前田（2009）では、「以上」が用いられる下記の構文では「からには」が用いられないため、両者の違いだとしている。

cf. べた部屋は昼も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。(草枕) (遠藤 1984 : 50, 前田 2009 : 174)

しかし、上記の構文における「以上」の意味機能は明らかに因果関係を表す表現ではなく、筆者の調査では、このような「以上」の使い方は決して一般的ではなく、漱石の作品しか現れないようなのである。

cf. 無精で我儘な彼は玄関先まで出て来ながら、中々応じそうにできなかったのを、母親が無理に勧めて漸く靴を穿かした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通り何方へでも動く人であった。(彼岸過迄)

従って、本稿は上記二例における「以上」の使い方は漱石の独特な表現だと考え、因果関係を表す「からには」の類似表現ではないため、この種の「以上」は考察対象としない。

[参考文献]

- 遠藤織枝 (1984) 「～からは／～からには」『日本語学』3-10
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク
- 塩入すみ (1992) 「「Xハ」型従属節について」『阪大日本語研究』4号 大阪大学
- 遠藤織枝他編 (1994) 『使い分けの分かる類語例解辞典』小学館
- 塩入すみ (1995) 「カラとカラニハ―理由を表す従属節の主題化形式と非主題化形式一」『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 仁田義雄 (1995) 「シテ節の「ハ」による取り立て」『阪大日本語研究』7号 大阪大学
- 久保るみ (1997) 「「以上」と「からには」について」『日本語・日本文化研究』7号 大阪外国語大学
- 中里理子 (1997) 「順接条件を表す「には」「からには」「以上」」『埼玉短期大学研究紀要』6号
- 毛 文偉 (2004) 「「～カラニハ」と「～イジョウ」に関する一考察」『日本学研究一記念中日邦交正常化三十周年』上海外語教育出版社
- 藤井涼子 (2005) 「「P 以上 (ハ) Q」文の意味用法一話し手の論理に基づく必然性を述べる文一」『同

〔用例出典〕

井上靖『あすなろ物語』・新田次郎『孤高の人』・立原正秋『冬の旅』・曾野綾子『太郎物語』・安部公房『砂の女』・山本有三『路傍の石』・井伏鱒二『黒い雨』・星新一『人民は弱し官吏は強し』・武者小路実篤『友情』・司馬遼太郎『国盗り物語』・松本清張『点と線』・高野悦子『二十歳の原点』・三浦綾子『塩狩峠』・有島武郎『或る女』・夏目漱石『こころ』『三四郎』『硝子戸の中』・柳田国男『遠野物語』・北杜夫作『榆家の人びと』・村上春樹『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド』・山本周五郎『さぶ』・渡辺淳一『花埋め』・沢木耕太郎『一瞬の夏』・遠藤周作『沈黙』・倉橋由美子『聖少女』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・阿川 弘之『山本五十六』

（ま しょうか 大学院人文社会系研究科 修士課程2年）